

地域住民による森林資源管理の促進 (2)

ーフィールドワークのアプローチとファシリテーションー

久保英之・樋山千春

1. はじめに

前回は RECOFTC の沿革及び活動の概要について簡単な紹介をした。今回は、タイ国内で行っているアクションリサーチ手法を用いたプロジェクトの事例、および普及員などのフィールドワーカーに求められる技能の一つであるファシリテーションに関する研修についてその概要を紹介する。

2. アクションリサーチ手法を用いた地域住民による森林資源管理の促進

(1) アクションリサーチ

アクションリサーチとは、行動と調査研究を統合した方法論であり、共通の関心と問題意識を持つ人々（地域住民、研究者、普及員など）が共同で計画、行動し、その行動の過程および結果を観察、省察（反省）する。そして、ここでの反省点を次の計画、行動に反映させていくというものである（図1参照）。人々は、これら一連の実践を通じて学習し、より効果的な行動方法を見出していく。また、実践を通じて得られた洞察は、他の同様な状況において活用し得る知見となる（Fisher and Jackson 1999）。参加型アクションリサーチでは、知見を生み出すこの一連の過程を実践の当事者（地域住民）が主導し、外部者（研究者、普及員など）はその過程を促進するための触媒役（ファシリテーター）となる。

アクションリサーチという考え方をプロジェクト実施に採用するのは、(i) アクションリサーチではプロジェクト実施を関係者の学習プロセスとして捉えるため、成果の追求に加え、実施過程を通じて各々の関係者の知識・技能など

Hideyuki Kubo and Chiharu Hiyama: Facilitating Participatory Forest Resource Management (2)

アジア太平洋地域コミュニティフォレストリー研修センター

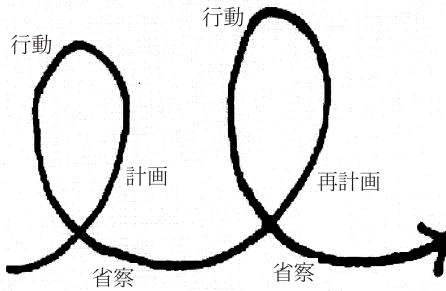


図 1 連続的な学習プロセスとしてのアクションリサーチ (Kemmis and McTaggart 1988 より)

能力の向上を図るという明確な目的意識を持てる、(ii) プロジェクト実施を通じて、他のプロジェクトおよび政策、行政施策に有用な知見を生み出すことが出来る、ことが主な理由である。前者は、特に当事者である地域住民のエンパワーメントを意識している。これらの観点は、いわゆる従来の「プロジェクト」においても取り入れられている場合がある。しかし、敢えてアクションリサーチとするのは、従来型プロジェクトでは事前に立案した計画通りの成果を得ることが強調されてしまうことによる。アクションリサーチでは、行動の結果を省察し、そこから得る知見を次の計画に反映させていくことが強調される。それは、計画が随時変更されることを意味しており、行動の枠組みが事前に設定され、それに基づく成果を求められる従来型プロジェクトとは質を異にする。

地域住民による森林資源管理という文脈においてより重要なのは、住民が自ら計画、行動、省察を繰り返し行うことによって、資源管理における適正技術を見出し、その管理能力を高めていくことであり、自らの省察に基づく計画変更は必然なのである。

(2) プロジェクト事例：プレットナイ村住民によるマングローブ林管理

(i) プロジェクトの背景

プレットナイ村は、タイ東部カンボジア国境近くのタイ湾沿岸に位置する村である。過去、4万 ha 以上あったマングローブ林は企業による商業伐採およびエビ養殖池建設などによって、現在は2千 ha 程度にまで減少している。約170世帯からなる村の主要な経済活動は、果樹・ゴム園経営および零細漁業である。特に、全世帯の2~3割を占める土地なし世帯は、マングローブ林での甲殻類や貝類採取に生計を依存している。年々、水産資源の減少が顕著になる中で、住民はマングローブ林減少にその原因があるのではないかと考え、様々な行動

を行ってきた。1987年には、交渉の末、村のマングローブ林で長年に渡って行われていた企業による商業伐採を禁止することに成功した。一方で、近隣村の漁民による乱獲や資源管理権の不備などの問題が住民の間で認識され始めるようになってきた。1993年に僧侶が村で貯蓄グループを設立し、以降、グループの定期会合において住民はマングローブ林および水産資源の状況についても話し合いを行うようになった。そして、1998年に森林保全グループが結成された。

プレットナイ村住民と RECOFTC の協力関係は 1998 年末よりはじまり、RECOFTC は住民が自らマングローブ林を管理していくための森林管理計画づくりに関与してきた。その過程の中で、カニを中心とする水産資源の涵養、住民によるマングローブ林の計画的な管理、漁獲をめぐる近隣村との交渉、マングローブ林管理に関する権利保障、などの課題を住民が抱えていることを理解するようになった。そして、2000年10月からは、これらの課題に関する支援をアクションリサーチプロジェクトとして行うこととなった。

(ii) プロジェクトの概要

表1はアクションリサーチプロジェクトの概要を取りまとめたものである。プロジェクトは、住民自身がそれぞれの課題に取り組んでいくことを前提とし、RECOFTC は一連の過程においてファシリテーターとしてこれを側面支援する役割を担うものとして立案された。

プロジェクトにおける活動内容は、住民自身の関心と問題意識、およびその時々における様々な状況によって決定されるため、プロジェクトの開始時点では大まかな方向性とプロセスが予想出来るのみである。本プロジェクトでは、各々の課題において、概ね以下のようなプロセスを踏む可能性が予想された。

水産資源涵養では、ガザミ (*Scylla serrata*) の資源量増加に関心を持っている住民がグループを作り、相互にアイデアを交換するとともに水産研究者とも意見交換を行い、彼らが最も関心を持つ方法で資源育成のための実地試験を実施する。同時に、モニタリングの方法を考案し、データ収集を行う。試験の経過および結果を分析、考察し、そこから得られたものを基に次のステップを計画していく。

マングローブ林資源管理計画の立案、実施では、プロジェクト開始時点で既に一定の資源情報が住民の間で共有されているので、それに基づき、管理利用に関するルール作りを行っていく。このルールは、必要に応じて随時見直しが行われていく。

表 1 プレットナイ村住民による資源管理活動（過去，現在，将来予測）

プロジェクト開始以前	<ul style="list-style-type: none"> ●1987年，商業伐採の禁止に成功 ●1993年，貯蓄グループの設立 ●1998年，森林保全グループの設立 		
プロジェクト開始（2000年10月）			
課題	水産資源涵養	マングローブ林管理計画	ネットワーク構築
計画	<ul style="list-style-type: none"> ●資源涵養に関心を持つ住民がグループ作り ●グループでアイデアを交換 ●研究者との意見交換 ●資源涵養方法のアイデアを検討 ●実施する方法を選択 ●活動実施の計画づくり ●データ収集計画づくり（モニタリング） 	<ul style="list-style-type: none"> ●管理計画作りの必要性を確認 ●マングローブ林資源の概況について住民同士で意見交換 ●管理方法についてアイデアを検討（以上は1998年末より継続的に実施） 	<ul style="list-style-type: none"> ●近隣村，関係機関など利害関係者を同定
行動	<ul style="list-style-type: none"> ●活動実施 ↳ データ収集 	<ul style="list-style-type: none"> ↳ 管理計画に沿ったマングローブ資源利用 	<ul style="list-style-type: none"> ↳ 合意形成に向けた交渉
省察	<ul style="list-style-type: none"> ↳ 活動状況の検討 ↳ データ分析と考察 ↳ 次の課題設定 	<ul style="list-style-type: none"> ↳ 利用状況の検討 ↳ 課題設定（必要に応じて） 	<ul style="list-style-type: none"> ↳ 関係構築，合意形成の経過および成果を省察
再計画	<ul style="list-style-type: none"> ↳ 省察に基づく計画づくり 	<ul style="list-style-type: none"> ↳ 省察に基づく管理計画の改善 	

- 印は実施済みまたは実施中の活動
- ↳印は予測される活動（活動に関する意思決定は状況に応じて随時関連する住民グループによって行われる。従って，実際の活動内容は意思決定がなされるまで未定である。）

ネットワーク作りでは，近隣村との交流を頻繁に行い，相互認識を深めることを通じて資源収穫に関する合意形成の途を模索していく。行政との関係においては，住民による森林管理を権利として保障する法的枠組みが存在しないため，現場事務所レベルおよび本局レベルにおいて可能な方法を模索していくこととなる。

上記のようなプロセスが一つの可能性として考えられる中で，RECOFTCが担う役割は，(a) ワークショップやグループミーティングにおいて，住民が持

つ多様な考えを住民同士で共有し、それに基づいて合意形成を行っていくという経過をファシリテーターとして進めていく、(b) 他村の住民、行政、研究者、NGO など村以外の関係者とプレットナイ村住民との交流機会を設定し、住民自身が新たなアイデアを得る機会を創出する、(c) 特に行政との相互理解を進める、ことである。

(iii) 現在の進捗状況

水産資源涵養に関する活動では既に進展が見られる。水産資源涵養グループが結成され、グループメンバーは卵を抱える雌ガザミをエビ養殖池に放し、孵化させることを考えた。しかし、水産研究者と意見交換する中で、ガザミの人工孵化成功率は実験室においても極めて低いことを知り、自然生態系の中で資源増殖を行っていくアプローチを選択した。具体的には、長方形の籠(2m×1m×1m)を「ガザミ銀行」と命名し、卵を抱える雌ガザミを捕まえた住民からこれを一時的に預かり、マングローブ林内の河川に設置された籠に入れる。ガザミは産卵し、卵は水流によって林内に流されていく。その後、雌ガザミは所有者に返却される、というものである。

この行動計画は、研究者との意見交換を参考として、グループが考案したものである。現在は、この試みの成果をどのように計測するのか、モニタリング方法を考案するためにグループ、研究者の間で検討が行われている。

これまでの経過の中で、RECOFTC スタッフはファシリテーターとして主に二つの役割を担ってきた。一つは、住民主体の活動アプローチを理解できる水産研究者をプレットナイ村の住民に紹介したこと、もう一つはワークショップおよびグループミーティングに参加し住民自身が活動を振り返り批判的かつ建設的に検証する機会づくりを行ってきたことである。

(iv) アクションリサーチとしてのプロジェクト

プロジェクトとしての活動は、2003年9月まで3年間継続される。この期間の中で、計画→行動→省察→計画……というプロセスが繰り返し行われて行くことになる。その過程で、プレットナイ村の住民が資源管理に関わる諸問題を解決していく能力をさらに高め、研究者、行政、RECOFTCは、住民とともに学んだことを体系的に捉え、その知見をマクロレベルにおける地域住民による森林資源管理の促進に活かしていくことがアクションリサーチプロジェクトとして重要な点である。

3. ファシリテーション技能に関する研修

上述したアクションリサーチプロジェクトにおいて、外部者である RECOFTC はファシリテーターとしてプロジェクト促進のための触媒役を担っている。ここでは、研修について述べる前に、まず、ファシリテーション技能の必要性が認識されるに至った経緯について概括する。

(1) 普及員に期待される役割の変化

RECOFTC が設立された 1980 年代後半は、農林業および森林管理に関する普及活動において、住民のニーズに応える適正な技術を伝えていくことが、普及員（森林官を含む）に期待された主な役割であった（表 2 参照）。この目的のため、RECOFTC の研修においても、普及アプローチに関する新しい考え方や住民ニーズ把握のための方法に関する内容が中心であった。1990 年代に入り、住民が抱える問題やその分析、そして問題解決のための方策立案、合意形成および実施に至る一連の過程を担うのは住民自身であり、普及員の役割はこの過程を側面支援することに留まる、という考え方が広まり始めた（側面支援の具体的方法については、本誌 47 号熱帯林業講座：社会林業（2）に詳しい）。このような役割認識の変化に対応する形で、RECOFTC の研修も、住民主体の活動を側面支援する上で普及員に必要とされる知識および技能に関する研修に焦点を当てるようになった。ファシリテーション技能はその中心に位置づけられるもので、RECOFTC の国際研修では殆どのコースで、セッションの一部に取り入れられている。

ここで紹介するコースは、その国際研修の中で、普及員として求められるファシリテーション技能についての実技演習に特に焦点を当てたものである。

表 2 普及員に期待される役割の時代による変化

年 代	普及員の役割
～1990 年代前半	ニーズ把握，適正技術の移転
1990 年代後半～	共同学習，情報提供，合意形成過程の支援

(FAO 1988, AGRITEX 1999 より)

(2) 研修コース「参加型森林管理普及におけるファシリテーション技能」

(i) 研修目標

本コースの目標は、各々の分野における専門知識および経験を持っている研修生が、以下の内容について理解し、必要な技能を身につけることである。

* 地域住民による森林資源管理を促進していく上で普及員が担うべき役割

* 普及員に必要とされる基本的な姿勢および技能

* 研修終了後、通常の活動の中でファシリテーション技能を活かし、更なる技能向上を図るための行動計画策定

(ii) 研修の特徴

研修は、研修生同士による相互学習を中心に行われる。相互学習を促進するため、シミュレーション、グループワーク、ロールプレイなどの研修方法が採用されている。その中で研修生は、自らの知識と経験を他の研修生と共有し、お互いに学び合うことが求められる。以下は、ファシリテーション技能演習に関するセッションの一事例である。

(iii) 構成、内容

本研修コースは大別して三つの分野、(a) 普及活動について、(b) 参加型普及活動に関する概念および一般的なプロセス、(c) その実践に必要なファシリテーションの諸技能、から構成される。以下は各分野におけるセッションの概要である。

(a) 普及活動について

研修の導入部であり、普及活動に関する研修生自身の考え方や一般的なアプローチなどをテーマとして議論を深める。各セッションで取り組む内容は、1) 普及活動に関する研修生の認識をお互いに議論し、自らの認識について相対的な位置を知る、2) 普及における三つのアプローチ（講義型、技術移転型、ファシリテーション型）の特徴について理解を深める、3) 参加者個人が通常の普及活動で抱えている問題を発表し、対応策に関するブレインストーミングを行う、4) 普及活動のケーススタディーを取り上げ、普及アプローチ、参加のレベルという観点より分析を行う、などである。

シミュレーションを用いたセッション事例

テーマ：「多様な意見を持つ村人が参加するグループ・ミーティングのファシリテーション」

1. シミュレーション

(a) 研修生はファシリテーター役1名、村人役5～6名、観察者2～3名に別れる。

(b) ある状況設定のもと、村人役は各々役割を与えられ、ファシリテーター役が進行を務める。

<状況設定>：村人達が共有林内での薬草栽培方法について話し合う

<村人役回り>：薬草に関する知識が豊富な村人役、減少しつつある共

有林内の薬草を保全し増やしていこうと考える村人役，薬草を採取し市場で販売し儲けようと考えている村人役，薬草栽培に関心はあるが発言に消極的な村人役，薬草には関心がなくキノコ栽培を共有林内ですべきと考える村人役。

(c) 村人役の研修生はそれぞれの役回りになりきって，自らの知識をもとに議論に参加する。ファシリテーター役は，各々の役回りになりきって論議を展開する研修生達が，合意形成していくよう議論を進行する。

2. 考察，議論

* ファシリテーター役が議論のプロセスに関する分析を行う。その中で，ファシリテーターとして適切であった点，改善すべき点，などについて自己分析を行う。

* 村人役がファシリテーター役に対して，役回りになりきった立場からフィードバックとしてコメントする。観察者は，第三者的立場からコメントする。

* 各々の分析・コメントをもとに議論を行う。

3. 期待される効果

村人達が特定の課題について合意形成を図っていくというプロセスのシミュレーションで，ファシリテーター役はそれぞれの役回りに沿って議論を展開する研修生から多様な意見を引き出し，合意形成に向けた対話が行われるように場作りを行うことが求められる。村人役の研修生は各々の役回りに徹していることから，議論は平行線となりがちであり，ファシリテーター役は諸技能を駆使して対話を成立させることが課せられる。このため，ファシリテーター役を演ずる研修生の力量が直接試されることになり，本人にとっては自分の持つファシリテーション技能レベルについて極めて明瞭な現実を認識させられ，向上すべき技能に関する示唆を得ることとなる。

農民役，観察者は，各々の立場からファシリテーター役の諸技能を観察し，より適切なファシリテーションについて考察する機会を得る。

(b) 参加型普及活動に関する概念および一般的なプロセス

ここでは、「参加型普及活動サイクル（図2参照）」という概念を用いることにより、地域住民による森林資源管理を促進していく上で、普及員が担う役割について考察することを主眼としている。

表3は図2のサイクルにおいて、普及員がファシリテーターとして関わりと考えられる具体的な活動例を示したものである。セッションでは、各々の活動が何故必要なのか、ファシリテーターが果たす役割はどのようなものなのか、具体的にはどのような技能や手法が有効なのか、という点について議論が行われる。

(c) 参加型普及活動に必要なファシリテーションの諸技能

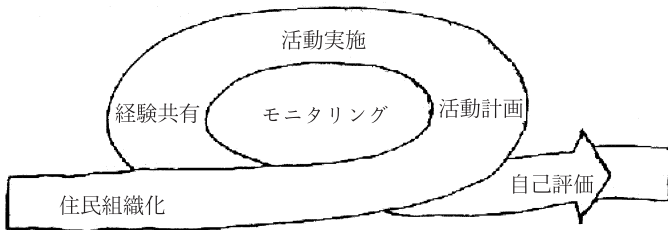


図2 「参加型普及活動サイクル」概念図

(Triraganon and Edwards 2000 より)

(注：本概念図はあくまで参加型普及活動における一般的なプロセスを示したものであり、すべての活動が必ずしも同様のプロセスを経るということではない。)

表3 参加型普及活動サイクルにおける具体的な活動例

サイクル	普及員による具体的な活動例
住民組織化	住民との信頼関係の構築，適切な住民グループの特定（もしくは組織化の支援），対象村落全体での情報共有，住民が抱える課題およびニーズの特定
活動計画	課題およびニーズの優先付け，解決策の検討，住民による主体的活動の確認，活動計画の立案
活動実施	活動の実施，新たなアイデアの模索
経験共有	村落内外での経験共有
自己評価	一連のプロセスの評価，新たな課題の設定
モニタリング	住民自身が日々の活動を振り返り改善点を見出す（省察）

表4はファシリテーターに求められる姿勢および諸技能について記したものである。ここでは、ファシリテーターとして求められる基本的な姿勢について理解を深めるとともに、必要な諸技能について実技演習が行われる。基本的姿勢のセッションでは、参加者がブレインストーミングを通じて「素直さ」、「思いやり」、「共感」、「関心」などファシリテーターが持つべき基本的姿勢として重要な要素を特定し、その後、「共感」という感覚を実体験出来るシミュレーションが行われる。

また、ファシリテーション諸技能の実技演習では、基本技能である「適切な質問の仕方」「ブレインストーミングの進め方」「議論と対話の違い、対話の進め方」「省察の進め方」「情報分析の進め方」について、シミュレーションおよびグループワーク手法を用い実践を通じた研修が行われる。

応用技能である集団内コミュニケーションについては、「議論への全員参加」、「多様な意見を持つ参加者が集まるグループ」、「意思決定」、「包括的解決方法の模索」というテーマでシミュレーションが行われる。

表4 ファシリテーターに求められる姿勢および諸技能

基本的姿勢		素直さ、思いやり、共感、関心
諸技能	基本コミュニケーション	観察、聞き取り、適切な質問、質問に対する解答、発言内容を確認するための復唱、要約、対話促進
	集団内コミュニケーション	信頼関係構築、全員参加促進、協調性構築、相互理解促進、包括的解決促進、紛争解決
	学習促進	学習機会特定、省察機会提供、状況分析、経験共有
専門的知識		

(Triraganon and Edwards 2000 より)

(3) ファシリテーション技能が活かされるには

1990年代後半になって広まり始めた森林管理における住民主体の諸活動において、計画や活動を定めるのは主役である住民であり、普及員はファシリテーターとして脇役を演ずることが求められる。しかし、現実問題として、これまで技術移転を担ってきた普及員や森林管理の最終的権限を保持する森林官が、自らの意見を主張することを改めて住民の意見の聞き役となり、合意形成過程を側面から支援するという態度を取るのには容易ではない。これは、普及員が技能を身につけても、普及における考え方や態度が変わらなければ住民主体の活動を側面支援することは困難であるということを示唆する。従って、技能

を身につけると同時に、意識変革を促進していくことがファシリテーターとしての普及員を育成する上で極めて重要である。

4. おわりに

2回にわたり、RECOFTCの事業活動とその背景にある考え方、および具体的な活動内容について紹介してきた。RECOFTCの活動は、森林資源を利用する住民が自らこれを適切に管理していくことへの支援に集約される。地域住民による森林資源管理の促進に関わる活動を行っている日本の組織はまだ限られているが、アジアでは数多くの政府組織、NGO、研究機関等が活発な活動を行っている。RECOFTCは、この分野の拠点の一つであり、様々な知識と経験が集まる場所である。是非、日本の関係者にもこれらの資源を大いに利用して頂きたいと思う。尚、筆者らの連絡先は以下の通りである。

Eメール：okubo@ku.ac.th ホームページ：<http://www.recoftc.org/>

〔文 献〕 ・Department of Agricultural, Technical and Extension Services (AGRITEX) (1999) Learning Together Through Participatory Extension - A Trainer's Guide, AGRITEX, Harare. ・FAO (1988) Planning Forestry Extension Programmes, Field Document No. 8, Regional Wood Energy Development Programme in Asia, FAO, Bangkok. ・Fisher, R.J. and Jackson, W.J. (1999) Action Research for Collaborative Management of Protected Areas, In Krishna P. Oli(ed) Collaborative Management of Protected Areas in the Asian Region, IUCN, Kathmandu. ・Kemmis, Stephen and McTaggart, Robin (eds) (1988) The Action Research Planner, 3rd Edition, Deakin University Press, Australia. ・Triraganon, R. and Edwards, K. (2000) Facilitation Skills for Community Forestry Extension, RECOFTC, Bangkok.